

## 紙つづて

マキアヴェッリが『君主論』の執筆を始めたのは一五二三年のことである。その前年、彼が仕えたフィレンツェ共和政権は倒れ、次の政庁当局によって一切の職を解かれた。

十五年もの間、フィレンツェ国に尽くしたにもかかわらず、あらぬ謀反の疑いをかけられ監獄につながれた末、拷問まで受けた。それでも彼は釈放された後、フィレンツェ郊外の家で正装し、居住まいを正してこの論文を著した。

『君主論』は再雇用を求めての就職用論文だという見方が日本で紹介されて久しいが、結局、職場復帰はかなわず、彼の労作が当時の治世者に読まれることはなかった。

### マキアヴェッリの忠告

武田 好

『君主論』第二十五章で、彼は運命について言及した。そして十数年後に、友人である外交官グイッチャルディーニ宛て書簡に、ほぼ同じ言葉をつづる。

「運命や時間に身をまかせて拱手傍観してはなりません。時間とともにいつも同じことが巡ってくるとはかぎらないし、運命もいつも同じ運命とはかぎらないのですから」  
（『マキアヴェッリ全集第六巻』より）

自分の力を発揮できる外交の現場から退けられ、彼がどういふ思いで書き送ったかは察するにあまりある。手紙を書いた翌年、一五二七年にマキアヴェッリは亡くなる。イタリアは他国が覇権を争う場であり続けるのである。

（静岡文化芸術大教授）

2020.5.30

2020.5.30

中日新聞（夕刊）P.1